

京都の躰を語る女性の会会報

おはようさん

第九号

京職人の伝統と技／西陣織・多津美織物さん



改築された2階ショールームには、時代のニーズに合うインテリア小物が並ぶ

先代が好んだ松の柄

これからもしつかり
受け継いでまいります

今回の訪問先は創業嘉永三年（一八五〇）という老舗、多津美織物さんです。二年前に四代目店主巽文蔵氏が他界された後、奥様の敬子さんが五代目を継がれました。当時中学校教諭をされていた一人娘の依子さんも、急遽お店の経営に携わることに。五代目が巽家に嫁がれて来た当初のご苦労話や、これからの時代に合わせたお店の将来設計など、依子さんにもご同席いただき、お話をうかがいました。

■予期せず訪れた経営者への転機

五代目敬子さん

娘と二人、こうして新しいスタートを切ったわけですが、もう無我夢中とはこのことでした。「こんなことならもっと、いろいろなことを聞いておけばよかったな」と、思うことがいっぱいあります。そもそも私は名古屋育ち。嫁いだ先が京都の西陣ですから、言葉一つにしてもかなり違和感がありました。名古屋は風習や

わたしたちは躰といういささか古びた言葉を持ち出し伝統と文化の町京都において今も息づく“躰”や“訓え”に学び語りことから新しい子育て文化を提唱します

京都の躰を語る女性の会

〒616-0022

京都市西京区嵐山朝月町68-8

京都府神社庁内

TEL075-863-6677

FAX075-863-6665

<http://www.net-k.co.jp/situke>

味付けにしても関東色の強い所です。お舅さんに仕えるにしても近所付き合いをこなすこともひとつひとつが大変で。例えばお出かけの帰り道、近所の方と会うと「今お帰りですか、どちらに？」「へえ、ちよつと」なんて言いますね。この「ちよつと」というのが実に曖昧で抵抗がありました。私なら行き先や目的などを長々と話してしまうんですが、そうじゃないんです。「ちよつと」というひとことでお互いが済ませる暗黙の了解みたいなのが、京都特有の立ち入りすぎない謙虚さなんだろうね。

お店のことはすべて主人が切り盛りしておりましたので、私はもっぱら家内のことだけ専念しておればよかったわけです。それが一八〇度転換し、別世界に足を踏み入れたような感じでした。幸いなことに、昔ながらのおつき合いを続けて下さる職人さんや問屋さんのお力添えから、こうして変わらぬ商いをさせていただいていること心底有り難く感じる昨今です。



会社併設の工場内部には、織り手さんの昔ながらの手仕事とコンピュータ化が駆使されている

■和の文化、伝統を守りたい一心で飛び込みました 依子さん

教壇に立ち、子供たちに英語を教えていた私は会社勤務。それまでの自分は家業に深い関心を持つこともなく、外へ外へと目を向けていた気がします。両親も私の意思を尊重し、好きなようにさせてくれましたし、特別厳しく育てられた記憶もなく、ごく自然に西陣の中で生きてきました。今はほとんど聞けなく

なった機の音も、子供の頃はどの軒先においても当たり前のように聞こえていたものです。毎月お一日には氏神さんとお墓に参り、十八日にはあらめと小豆を炊いて朱塗りのお膳で供える。その意味とか由来も知らないまま、ただ普通に慣習として通り過ぎてきました。また、梅雨前になると、お店の人総動員で夏のしつらいにかかったり、お正月は黒装束で夏のご挨拶まわり。思えばそこかしこに季節を感じさせてくれる材料があふれていました。

通常は主に経理や事務的な仕事に携わっていますが、毎週末亀岡市の中学校に出かけております。子供たちに和服の着付けを指導しているのですが、これは和文化を学校教育に導入できればもっと和装が身近なものになるのではとの思いからです。今はお母様がほとんど和服をお召しになりません。ですから次の世代に伝わりにくくなってしまっています。背筋を伸ばした姿勢が与える凛とした美、しなやかな振る舞いや作法。そうした失われつつあるものを、もう一度子供たちに体感して欲しいですね。小さな頃から本物に触れることは、何より大切な心の教育につながると思います。

おかみさんのコラム

事始めとは

「おめでとうさんどす、本年もよろしくお願ひ申します」十二月十三日、京都中の花街で聞かれるごあいさつです。この日は「事始め」、もともと一般に行われていたもので、「事」とは家の中の神仏のまつり事を指していました。その後、お正月の準備全般をいうようになったのです。

今では、花街特有の行事と思われていますが、昔は商家でも別家さんが本家さんへ一年の御礼のごあいさつに行かれたものです。

花街では、御師匠様や親代わりのお茶屋さんや姉さんの家にお鏡さんをお供えし、「おめでとうさんどす・・・」のあいさつをして廻るのです。この時、着物は一つ紋の無地を着、ごあいさつの扇子を持ちます。この日は他に何の行事もなくごあいさつに廻るだけなのですが、無事一年を終われるのもまわりの人のお陰様で、という感謝の気持ちを行動に表し、ごあいさつをする事の大切さが日々の生活の中に生きていく花街だからこそ、今も残っているのでしょう。

また、この頃年々早くなっているお歳暮も、本来はこの事始めよりお持ちします。お歳暮の意味が、一年の感謝を贈り物に託してごあいさつにお伺いするものなのですから・・・。

大文字 今井貴美子



五代目店主巽敬子さんと一人娘の依子さん

■守りたいもの、伝えたいもの

四代目敬子さん

この業界も機械化が主体となった現在ですが、当店では手機織りの風合いにこだわり、できる限り手仕事ならではの技を残し、守っていきたいと考えております。西陣の現状はまだまだ厳しい状況下にあります。昔から『西陣とでんぼ（おでき）は大きくなると潰れる』と言われてきたように、細々とでもその地の風土を守っていくことが私たちの使命ではないでしょうか。品質本意でいかにコンパクトにして生き残れるか。これからの経営はその一言に尽きると確信しております。



築百年の風格京の町家づくりをそのままに、一般開放もされている（要予約）

また、帯は材料部門から図案、織りに至るまで多くの分業によって制作されます。つまりその一人一人の職人さんがいわば家族のような存在なのです。皆さんの生活を担う責任の重さ。また、全員の自覚とプライドこそがお店の財産と受け止めております。

主人がこよなく好んだのは松の柄なのです。展示会に行つて何百もある中からうちに向く柄を選ぶ目、見抜く力は鋭いものがありました。私の代になった今でも、「帯のことなら多津美さん」「松の柄なら多津美に行けばいい」そうおっしゃってくださるお客様がいてくださいます。これは何よりも励みになります。

おかげさまで当店は、昭和四十四年京都府知事より老舗百年の表彰を、平成元年には織物業に尽力した功績により黄綬褒章を受けました。これもひとえに皆様方のご愛顧の賜と深謝しております。これからも一同、家伝の引

箔の技法をはじめ、西陣の伝統文化を伝えることを生業として暖簾を守つていく所存です。

丹田に力をいれるのよ

かつてNHKで放映された人気アニメ『未来少年コナン』は『もののけ姫』を作った宮崎駿の演出した作品でも人気を博しています。未来少年であるコナンは昔の子どもの身体をしています。鉛をもって走り回る姿、女の子を助け、背負いながら高いところから飛び降り、シコ立ちで着地する姿。足腰が鍛えられ、足の指で踏んばったりしています。現在の子供達はどうか？

私の元へ日本舞踊のお稽古に参ります若い人に「腰を入れて！」と申しましても、どうするのか戸惑っています。「丹田に力をいれるのよ」と言っても、その丹田すら自分の身体のどの位置か知りません。このような日本の伝統的な身体文化を「腰肚文化」というそうです。腰と肚が決まれば背筋は自然に伸びます。それは単に身体の中心感覚だけでなく、精神的な意味も含んでいます。昨今のムカツク、キレる子供は、この身体の構えの乱れと因果関係が少なからずあるようです。

また欧米社会の基準がさまざまな形で日本社会に浸透してきた現在では、「腑に落ちない」や「腹に据えかねる」という「からだ言葉」もなくなりつつあります。

コナンが昔の子供の身体感覚を身につけた少年像であるという事は、それを現在の子供達に求めているのではと考えられます。つまり今、この人気アニメは大人達がしっかりと子供達に「腰と肚を据える」という日本の伝統的な身体文化を伝え、躰るといふ必要性を示唆しているのではないのでしょうか？

藤陰流宗家二代目 藤陰静枝

例会報告

氏子の心意気が息づく瞬間

そこには未知の祇園さんがありました



去る七月十日、八坂神社から四条大橋にて執り行われた『御輿洗いの儀』を間近で見物し、山鉦巡行とはまたひと味違う祇園さんを体験することができました。当日はあいにくの雨模様となりましたが、総

勢六十余名の参加がありました。前回取材でお世話になった二軒茶屋・中村楼さんにて名物の田楽弁当と祇園祭奉納の稚児餅を頂きながら、ご主人の辻さん、元八坂神社神職花房氏、当会提言者井上氏、それぞれの祇園さんにもまつわる興味深いお話もお聞きしました。

・交通規制がひかれる四条通りに、*二つの大松明の火の粉*をまき散らしながら清め歩く若衆たち。「ほいとほいと」という勇ましい掛け声とともに彼らの熱気はここ石段上にまで伝わってきました。この時ばかりは華やかな街のネオンも不釣り合いに映り、暗闇に提灯だけが灯されたといういにしえの時代を彷彿とさせました。



*注：大松明（全長約5メートル）のから消し（炭）を家に持ち帰り、半紙に包んで水引をかけて祀ると無病息災のご利益があるといわれる。また、松明の竹でお茶杓を作る人もある。

舞殿には六角形・四角形・八角形の形をした三基の御神輿があり、御輿洗いに参列する「中御座」以外はお飾りが済まされ出番を待ちます。
*夕方になると提灯が灯り、また違う表情が楽しめるそうです。

*注：祇園の舞妓衆の髪も十日から二十四日までの間は「かつやま」というスタイルに結われる。また、十七日から二十四日までの一週間、誰にも口外せず密かにお参りを続けると願いが叶う無言参りという花街らしい慣わしも残る。

いかがでしたか。氏子の心意気。やはり京都は「祭の町」でした。